



畫學百卷之三





子在
白一
林
香
秋

鳥
一
女

雨
花
鳥
林
三

二



五十一

李

花ごらん付色赤いごらんごらんごらんごらん
或い白福木より果は福子の汁け合
こぼれてこぼれいを入る

紅雀

背黒く胸赤く尾黒く毛色のあざあざ
はてその外は赤く地肉色わくわく
朱んまより果は赤い毛ごらん

五十二

山茶

茶梅花 海紅花

白赤あり白いむら地白福の具ぬるごらん
ふまごらんごらんごらんごらんごらん
福まより果は赤い汁け合

鴛

背黒く目の四角のりは黒く舌は赤
中より果の具は切らばは赤くすま
の具上より果は赤くすま
白いたつり果色の上より赤くすま
肉色わり上より朱をくべ
世より果は赤くすま
腹まより果は赤くすま

竹ん花や淡い表の葉坊と

竹之





やういふさういふ秋海棠のさうい

収

五十三

秋海棠

花は花多々の具わりのあやうくまあやうがら
葉は葉もわうくは毛をさういふ葉のけ也
ゆふうりありさやさういふありあやうくまあ
いふいふ

鷓鴣

鷓鴣

嘴は足はたはさく熱許りさういふはさういふ
唇の色は上三朱びみりさういふのさうい
どみりさういふ合色さういふさういふ
すういふ

五十四

系櫻

垂絲櫻

花は花多々の具わりのあやうくまあやうがら
葉のけ葉もわうくは毛をさういふ葉のけ也
ゆふうりありさやさういふありあやうくまあ
いふいふ

練雀

連雀

練雀の尾長し連雀の尾短し
はさういふさういふはさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふ

むらさきやうきふてふとりもわらふ
月ころひのけふ系様るも

雅如



美鶴乃形海もいし井子のむ

妻木
琴洲

かきりくろみれいけいここれいせい
あつりきさうまけくもたふ

故人
正輔



五十七

蒲公英

花ちまの具ちぶごらんけつとよい志
まうけままのけまうらまゆまよニ
むん編まうら
けは中草の仕中るれども小まのい
しを下まに用るれまんとまうら
ら其種大和中けはまうら直つ仕
て

雲雀

雲雀は草花の種まうらまゆまよ
朱まをいけいけいけいけいけい
わの凡初うらごらん毛去服ごらんま
もうら

五十八

黄蜀葵

秋葵

花ちまの具わりのごらんけつとよい志
実まうらまゆまよまゆまよまゆまよ
くまうらまゆまよまゆまよまゆまよ
まゆまよ

雀

雀は草花の種まうらまゆまよ
くまうらまゆまよまゆまよまゆまよ
まゆまよ



有長枝庭やまゆぐ櫛

白主



山々々々々々通辭やまゆぐ

蒼官堂

一 曉

五十九

櫻

拾

花散品あり略々

花下地多すの具々すくをすく備あごらん
白ひきまはれ思つてはくべし高中にはく
まはれて初をへるしな合まらざるや
よりらまよひに二はん細まらざるべし
本もみりよりあつらふくもくべし合
さうてさあひとへべし

秦吉了

嘴は長きとちまらしては立嘴のりて
いしてまらるべし其様思はしては立
よりひひすぞんぞんあそびせべし
いひてあそぶまらるべし風切向さ
あごらんへべし

六十

豆藤

花あまの具あまらけとてかまら
いて実へし小枝は朱ぞんはくけく
ら

小陵鳥

嘴は長きとちまらしては立嘴のりて
いしてまらるべし其様思はしては立
よりひひすぞんぞんあそびせべし
いひてあそぶまらるべし風切向さ
あごらんへべし

粒一少 豆一藤 名一 小一陵 鳥一翼 輕
精一神 模一寫ノ 妙 真一似 發一如 鳴

岩 岑 水



けしきや来ては山に木蓮花

萬金



かきせしめりて糸の花いろ

子石女
花好



六十三

木蓮

白紫二色あり

白くふんふんはごらんにておとどく一葉は
まきまのけりおとどくまきまのけり

桑鷹

いんがら

はるかにしつ掛るはるかにしつ掛るはるかにしつ掛る
はるかにしつ掛るはるかにしつ掛るはるかにしつ掛る
はるかにしつ掛るはるかにしつ掛るはるかにしつ掛る

六十四

牡丹

牡丹草 富貴草 名取草

紅白紫法黄ありはれも地を年の具を
るまじりてはれも地を年の具を
るまじりてはれも地を年の具を
るまじりてはれも地を年の具を
るまじりてはれも地を年の具を

菊戴

鶉

はるかにしつ掛るはるかにしつ掛るはるかにしつ掛る
はるかにしつ掛るはるかにしつ掛るはるかにしつ掛る
はるかにしつ掛るはるかにしつ掛るはるかにしつ掛る



鳥の庵、むしり、使名つり牡丹畑

女羅 琴風



蔓のつや葉葉のむらさし

斗百

六十五

菜萁

花ごらんろは葉細き葉のけあらし
まうらま本らうりつひれごらん合せし

頂小鳩 又 斑鳩 鶉

昔はさくは同葉ごみ類あごらんま服
ごらんまは葉細き葉のけあらし
一風切尾ごらんまは葉同也葉の
上籠してはまごらん

六十六

石榴

花も他肉を朱にてわりとあふらま
まごらんつひれごらんまあらしけ
葉細き葉のけあらし

八頭

昔はさくまは月の内葉ごみ是合まらご
朱にてわりとあふらまあらしけ
まごらんつひれごらんまあらしけ
ごらんまは葉細き葉のけあらし
一風切尾ごらんまは葉同也葉の
上籠してはまごらん

松栢咲く齒研く八川から

曼羨



夕空や松老くは遠山

第泉

七十一

桔梗

白雲二色あり地味黄法合わりの花
くまよふいんがゆり中よりごらんくまよ
全株ごらん位立葉糸細き葉の汁より
らぬぬ去穂とくまよへ極合ごらん
付立葉もみけてつごらんごらんごらん
ごらんつごらんごらんごらんごらん
トけてはくごらんごらんごらん

黒鶉

嘴は合葉土類白くごらんごらん
黒鶉は合葉土類白くごらんごらん
黒鶉は合葉土類白くごらんごらん

七十二

丁子草

花ごらんごらんごらんごらん
花ごらんごらんごらんごらん
花ごらんごらんごらんごらん

尾長 鶉鳳

嘴は合葉土類白くごらんごらん
尾長は合葉土類白くごらんごらん
尾長は合葉土類白くごらんごらん



尾長 鶉鳳

逸志

